

Date

# 「石牟礼道子対談集 魂の言葉を紡ぐ」

石牟礼 道子著

## 切ない〈近代〉への問い

一人の作家に近づくと、直接その主著から始めるより、対談や講演集の方が入りやすい場合がある。とくに時代性と情報社会の中、ジャーナリスティックな面が強調されるあまり、作品の輪郭が見えにくくなったりする。そんなとき、作者の意志とは無関係に遠まわりの経路を読者は選択するのかもしれない。二十数年前の学生時、『苦海浄土』を読んで以来、どこか意識的に避けてきたこの作家の言葉に耳を傾けながら、そういつたことをかと思えていた。

対談の年代は、ちょうどその空白を埋めるべく、七十年代後半から九十年代にかけてである。相手も雑誌の編集者から作家、フェミニズムの運動家、看護婦、多国を放浪してきた翻訳家、染色家、ドキュメンタリーの映画監督らと多岐に及んでいる。根底に流れるものは、切なく苦しいまでの〈近代〉への問いであり、今後人類がいきつき、地球上にもたらそうとしていくものは何か、ということだ。

「人間は滅びの方へ行ってしまうかも知れないけれど、水俣の患者さん達を見てみると、何か人類に残せる言葉というのがあるんじゃないか、という気がしています。あれほどの絶対受難にあわれた人たちが人間を見捨てないで、これから人を見つけたらとおっしゃるんですものね。人間がいるにちがいないって、そういう人たちが魂を通じ合わせたいとおっしゃっている」

この対談集を読んでいて、あらためて彼女の『言なき声』をうっしとする巫女的資質と母性の原風景を感じさせられた。しかも自らの表現と美意識に対しては、そこであまり使命感を言いたてたくなく、論理や倫理でも見たくなく、と海原にも似た内面を透視しつつ、一見、聞き書きのふりをしながら実は、現代の『口説き』をこらみていると、その創作上の意図を述べている。方法論的に極めて自覚的な作家の一面である。

一人ひとりとの『生きた言語』のやりとりは、〈近代〉という稀薄な作家の画像を、石牟礼道子という稀有な作家の実像を、不知火の火影のように浮かび上がらせている。評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）



河出書房新社・3200円